

月刊

書字文化

～日本書字文化協会機関紙 No44～

平成 29 年



5月号

一般社団法人日本書字文化協会機関誌
代表理事・会長 大平恵理

〒164-0001 中野区中野 2-13-26 第一岡ビル 3 階

電話 0 3 - 6 3 0 4 - 8 2 1 2 FAX 0 3 - 6 3 0 4 - 8 2 1 3

E メール info@syobunkyo.org



目次

初めの一步 教室・教場在籍者一覧を送付	2
第 6 回全国書写書道総合大会実施要項	3 (PDF に移動)
同指定課題一覧	3
総合大会の特色	3
訃報・城所湖舟先生	4
コラム・こころ(大平恵理)	5
同・きのう今日あす (渡邊啓子)	6
同・教学半(池田圭子)	7

在籍者一覧が5月中旬に送付されます

検定・ライセンスや全国大会に参加された多数の方々の審査結果をしっかりと保存管理し、教室・教場をサポートして書写書道を生涯教育とする伴走者となるため、書文協ではITシステムを整備しています。その最初となるのが在籍者一覧です。教室・教場からいただいた資料を基に、データ化したものです。

訂正して5月末までに返送を

このデータを印刷した在籍者一覧が5月中旬、書文協本部から届きます。教室・教場では退会者に線を引き、また間違いを直し、新規の方は事前参加登録用紙をご提出ください。(年度途中で参加される方は、大会前等に対応いたします。)5月末を目途に本部に送り返してください。

在籍者一覧の書き方

学年は自動的に1年進んでいます。進学した小・中・高校名、転校先の学校名を書き添えてください。学校名は、公立の場合は神奈川県横浜市立××小学校、私立の場合は神奈川県・××小学校としてください。幼稚園保育園の場合も同様です。設立法人名は書かなくて結構です。大会の優秀者一覧冊子などに学校名が出ます。

次いで出品券が発行されます

在籍者一覧を基に、出品券が製作され、教室・教場に送付されます。大会・書字検定の場合、出品券を作品の所定の位置に貼って出すだけで結構です。出品目録の作成が不要となり、先生の事務処理の時間がとても軽減されます。出品券の名前の字体が賞状などにそのまま印字されますのでご注意ください。新年度の出品券が届くまでは、お手元にある出品券を学年等の訂正はせずにそのままご使用ください。



証明書作成の基になります

こうして保存されたデータは、個人の求めに応じて成績証明書として書文協が発行します。潜在能力として「継続する力」が求められる昨今、進学、就職などで成績証明書の発行を希望する方が増えています。

個人データは法規に基づき保護

個人データは、個人情報保護法など法規に基づき保護されます。各個人・教場・教室の同意なく加筆削除、公開されることはありません。書文協の個人情報保護ポリシーはホームページ1面の「プライバシーポリシー」からご覧下さい。

第6回全国書写書道総合大会

実施要項、指定課題を公表

例年のように今年度も総合大会が開催されます。構成コンクールは、ひらがな・かきかたコンクール（応募締め切り7月28日必着、結果発表9月上旬）、全国学生書写書道展（席書き参加申し込み締め切り7月7日、公募締め切り9月15日必着、結果発表10月末）、全国硬筆コンクール（同）。

6回目を迎えた今回も文部科学省をはじめ小中高校長会、全国書写書道教育研究会の後援を申請いたします。

賞状・賞品の発送をできる限り早めるようにいたします。審査結果は賞状・賞品の発送に同封いたします。アルバム・表装の注文も同封いたしますので、写真などを添えてご注文ください。

総合大会では前回通り展示会交流会を行います。会場は浅草公会堂を予定しています。秋の1日、下町散策を兼ねてお出かけください。

参考手本、評価の観点6月上旬にホームページ掲載

参考手本、評価の観点は6月5日ごろを目途にホームページに掲載予定。同時に刷版発売も開始します。参考手本、評価の観点とも自由にダウンロードしお使いください。

要項、課題はこちらからご覧ください

→第6回総合大会実施要項 →指定課題一覧

総合大会の特色

- ◎手本があります。大平恵理揮毫、写すのではなく書き方の参考に。
- ◎「評価の観点」を公表。大会参加が即、学びになります。
- ◎権威ある審査団「書文協中央審査会」(←)が厳正審査
- ◎全国レベルの腕試しをしてみましよう。
- ◎全員に何らかの賞が授与されます。継続こそ力、です。
- ◎作品化に工夫。作品の表装、記念アルバム化ができます。

城所湖舟先生逝去

～書写書道の普及に懸けた情熱は不滅～



書文協中央審査委員会の顧問、城所湖舟先生が4月10日早朝、入院先の病院で亡くなりました。86歳。なおみ夫人によると4月には入退院を繰り返し、老衰による逝去でした。筆は直前まで持たれていたようです。現日会の名誉顧問であり横浜国立大学名誉教授。書の太い足跡を残されました。合掌。

書文協の審査や発表会によくおいでいただき、ユーモアあふれる口調で元気なご指導をいただきました。誰よりも早く審査会場に到着される姿がいつもありました。豊かな見識を背景に、ズバリと言われるご意見には、権威ある中央審査委員の先生方も一目置かれる風がありました。

城所先生は現日会第五代会長。現日会(事務局・東京都豊島区上池袋1-90-3、文書館内)のキャッチフレーズは「自由と奔放 燃える現日」。80歳の時には銀座、鳩居堂で傘寿記念個展を開催。書文協からは大平恵理会長、渡邊啓子副会長が鑑賞に伺いました、大平会長は「城所先生は温かみのある字を書かれる方で、作品のおかげで会場にすごく親しみやすい空気が流れていました」と話しています。

この個展の後の懇親会で、大平会長らは現日会の多くの先生方と交流しました。宮前嘉則先生(当時、桐生市・境野中教諭、現、群馬県教委指導主事)もその一人。宮前先生は同中PTA会長だった書文協会員の大澤元代先生(桐生市)と交流があり、すでにジュニア書写指導者を育てる教学キャリア運動に協力をしていただくなどお世話になっていましたが、書写書道普及のためには団体を問わない城所先生の熱情が現日会の特色を表しているのでしょうか。

書文協は城所顧問の教えを守り、流派を超えた書写書道の普及を目指すことを理念としてまいります。(文責・谷口泰三書文協専務理事)



「

」

ろ

大平 恵理(書文協会会長)

「発達障害を書写書道で克服しよう」

書文協は検定、ライセンスや全国大会開催と共に直接教える教室を持っています。書写書道専修学院です。中野本部教室と青梅(東京)教室もあり、バリアフリーで全国に開いた通信教育も含まれます。

指導方法や書道具について研究・開発する大事な場所でもあるのですが、このところ目立つのは発達障害という病名を訴える親御さんが目立つことです。昔は知らなかった病名で詳しくありません。ただ、親しい幼児教育の先生の高校の息子さんが小さいころから自閉症の極度の発達障害で、母子ともに大変苦労されているのは知っています。なかなか大変な生活です。ですから軽々に言いたくないのですが、他方で最近では、なんでもかんでも発達障害にしてしまう傾向があるように思えます。

小学生のA君の場合、少々雑ですが硬筆も毛筆もなんとか字を書いてくれます。筆跡から、私の言う事をちゃんと聞いてくれたな、と感ずることもあって嬉しくなります。

字はともかく、彼は書道具の出しそろえ、片付けがなかなか不得手です。もたもた、ゆっくり……。付き添いのお父様がとうとう怒り出します。「早くしなさい」。それはいけません、お父様。小さい子どもたちって皆そうなんです。何度も何度もやって身につけていくものなのです。下敷き、文鎮、筆、墨、硯……。片付ける手順を呪文のように唱えながら覚えていくのです。

書道のお道具の出し入れに限らず、日々の生活で子どもたちにイライラすることはよくあるのではないのでしょうか。でも、それを簡単に「発達障害かしら？」などと口にする親が多いように思われます。

一という線を一本引くにしても、道具を整え、気を鎮め、左から右に筆を引く。この基本が発達障害と言われる動作にもとても効果があるように思います。科学的な対応はもちろん大事ですが、基本動作を繰り返す書写書道の効果も高いように思えます。A君に接して、この子はかならず書写書道でビシリと育てられる、との思いが強まるばかりです。近々、お母様とじっくり話してみようと思っています。

きのう

今日

あす

書文協副会長 渡邊 啓子

「生」



音楽やミュージカルも好きで、音を楽しむのに学生時代よくライブハウスや劇場へ通ったものです。いつも気持ちよく音の波に乗って楽しんでいました。

音は、会場によっても、その日の構成によっても変化するので、連日行っても同じものではありません。CD等では伝わりきれない実際の音、演奏技術、演出に魅了されます。

先日、卒業して以来になるでしょうか、久しぶりにライブ会場へ足を運びました。素の音を聞こうと、アコースティック弾き語り。ストーンと言葉が響き心に刺さったかと思ったら自然と涙が流れていました。やっぱり生は違います。だからまた行きたくくなります。

書も「手書きは心が伝わる」と言われますが、状況や感情がよく表れるものだとつくづく思います。なので、読み返した時に、「こんなこと書いていたんだ。この時はいい字だったな・・・」とその時にしか書けなかつたろう書に触れ、感情を呼び起こす時もあります。

練習時にはお手本は大切です。練習を繰り返しても思うように書けない時、お手本を見ることで一瞬にして文字が変わる時があります。

また、直筆により作品の表現力も変化していきます。印刷では読み切れない味わいがあるのです。それも一枚いちまい変化します。なので、終わりはありません。何度でも書きたくなります。

講習会や練習では周りの方の作品を見たり、共に練習することでも変化します。

実物に触れたり、共に取り組める環境等を作り、書写書道の魅力を発信し続けたいと思います。



教 学 半

教えるは学の半ばなり（書経から）

池田 圭子（書文協教学参与）

北山幼稚園・就学前幼児毛筆授業報告

「園児の底力」



新年度を迎え、先月まで年中だった園児が、今月は年長となって少しだけお兄さん、お姉さんに成長したようにみえました。東京都府中市の北山幼稚園で進めている就学前幼児の毛筆一斉正課授業の話です。

以前は教室で静かな様子を見せていたのですが、ここ最近では、友人との交わりが増えたのかおしゃべりをしたり、隣の子にちょっかいを出す子も増えてきました。大事な成長過程とは思いますが、1チーム20分の授業では、一言も聞き漏らしてほしくないの、しっか

り注意をしながら授業を進めています。

8月の展示会に向けて、「くし」「いし」と、墨書きに入る前段階として水書きによる練習をしてきました。その最後の課題「しろ」を今月は練習しました(写真)。

4月の練習1回目は、「ろ」を練習しました。初めて毛筆で書く文字で、上手に書けないとかなりすごい文字になってしまいます。上手に書ける子も中にはいましたが、心配した通り、ほとんどの子がどうしたら良くなるか、考えてしまう文字となりました。



そして、4月の2回目、いよいよ「しろ」と書く時となりました。紙への字の配置の仕方を繰り返し説明してから書きだすと、前述した私の不安を払拭するような良い字が次々と書けていきました。前回たった2枚しか書いていない「ろ」がこんなに上手に書けるとは。園児たちの無限の力を見せつけられました。

5月の2回目からは、いよいよ墨を使っての文字書きとなります。園児たちの力を信じて、みんなが上達できるよう指導していきたいと考えています。